＜新聞記事から考えよう＞171116

記事はすべて（佐賀新聞 2017.11.16 付）

新聞を通して地域の歴史を学ぼう！
さが維新塾

記者会見を終えた横田めぐみさんの父滋さん（左）と母早紀江さん＝15日午前、川崎市

拉致40年、未解決を嘆く　26面

社会

1977年に新潟市立中１年の横田めぐみさん＝失踪当時（13）＝が北朝鮮に拉致され15日で40年となるのを受け、後半生を娘の救出活動に費やしてきた父滋さん（85）と母早紀江さん（81）が記者会見した。早紀江さんは「どうしてこんなに長い年月、助けてあげられないんだろう」と苦しみを打ち明けた。

（１面インデックス）

拉致解決 見えぬゴール

めぐみさん事件40年

老いた父母 政府に苦言

「信じてよかったのか」

横田めぐみさんが北朝鮮に拉致されてから40年となり、記者会見に臨む父滋さん（左）と母早紀江さん＝15日午前、川崎市

横田めぐみさん＝失踪当時⑬＝の拉致から40年の今年は、拉致被害者家族会の結成から20年目の「節目」にも当たる。高齢化の進む家族は「勝負の年」と位置づけているが、日本政府は解決に向けた道筋を見いだせないまま。進展のない現状に、家族からは政府への疑念の声が上がる。

⬇26面参照

■老老介護

「政府は知恵を練っていると思っていたが、40年たっても（消息が）分からない状況。本当に信じていてよかったのか」。15日に開いた記者会見で、母早紀江さん⑧①は手をこまねく政府に苦言を呈した。

未解決のまま過ぎた40年は夫婦に重くのしかかる。父の滋さん⑧⑤も会見終盤に口を開いたが、声は不明瞭で聞き取れない。早紀江さんは「いつもこんな感じで…」と寂しげな表情を見せ、夫の手を引いて会見場を後にした。滋さんの衰えはここ数年で進み、週の数日を介護施設でのリハビリに費やす。早紀江さんの「老老介護」による疲弊も周囲の心配の種だ。

■シナリオ

家族会は今年2月に決めた運動方針で「今年中にすべての被害者を救出せよ」と、期限を切って政府に解決を求め、安倍晋三首相も繰り返し、解決に向けた積極姿勢を強調してきた。

ただ北朝鮮がミサイル発射を繰り返し、首相が北朝鮮への圧力を強化し続けたことで、日朝関係は冷え込んでいる。北朝鮮は2014年のスウェーデン・ストックホルムの日朝合意で設置した、拉致を再調査する特別調査委員会を16年に解体。その後は拉致問題を「解決済み」とする従来の立場に戻り、「関心がない」（宋日昊（ソンイルホ）・朝日国交正常化交渉担当大使）と突き放すまでになった。

暗礁に乗り上げる拉致問題の進展に向け、首相が選択したのは米国との共闘だった。11月の来日を控えたトランプ米大統領に拉致被害者家族との面会を電話会談で要請。これに先立つ9月の国連総会前には、トランプ氏が総会演説で拉致問題に言及するよう働き掛け、いずれも実現させた。

政権内部では、首相がトランプ氏と金正恩（キムジョンウン）朝鮮労働党委員長の仲裁役を務めつつ、拉致問題進展を図る―というったシナリオもささやかれ続ける。拉致問題に携わる政権幹部は「圧力路線の一方で、対話の糸は切らさないことが重要だ」と指摘する。

■成果ほしい

家族会が救出の「期限」とした17年も残り1カ月余り。11月のトランプ氏との面会では、熱心に耳を傾ける大統領の姿勢に「共感してくれていた」と手応えを口にする家族もいた。ただ、家族が求めるのは被害者との再会という「成果」だ。

面会後、田口八重子さん＝同㉒＝の長男飯塚耕一郎さん㊵は「救出に向けてどう動くかが重要」と政府に注文を付けた。老齢の家族に残された時間は少ない。言葉が出にくい滋さんが体調を押して会見に出席した背景には、「問題を風化させたくない」との思いもある。

早紀江さんは、めぐみさんと再会しても、衰えで娘と認識できなくなってしまう状況を懸念する。「意識あるうちに『めぐみちゃん』と言ってあげたい。1時間でもいいから会いたい」。絞り出すような訴えに政府は応えることができるのか。

拉致40年の経過

1977年11月15日	▶横田めぐみさんが新潟市内で拉致される
2002年9月	▶小泉純一郎首相（当時）が訪朝、北朝鮮が拉致を認める。めぐみさんは「死亡」と説明
10月	▶被害者５人が帰国
14年３月	▶横田滋さん、早紀江さん夫妻が、めぐみさんの娘キム・ウンギョンさんとモンゴルで初対面
5月	▶スウェーデン・ストックホルムで日朝局長級協議。拉致被害者の再調査で合意
16年２月	▶北朝鮮が再調査のため設置した特別調査委員会の解体を表明
17年11月6日	▶トランプ米大統領と早紀江さんらが面会
15日	▶めぐみさん拉致から40年

北朝鮮側が提供しためぐみさんの写真

「死亡」の知らせに涙ぐむ両親

トランプ大統領と面会した早紀江さん（写真はロイター）

（上：２面）

〇記事の中から、横田滋・早紀江さんのことばから、印象に残ることばをさがしまとめよう。

＜書き方＞

「‥‥」ということばから、〇〇ということがわかり、～～～という点で（と思い・考え）印象に残る。

（下：２６面）

めぐみさん拉致40年

両親、苦しみ語る

「なぜ助けられない」

㊤横田めぐみさんが北朝鮮に拉致されてから40年となり、記者会見する父滋さん（右）と母早紀江さん＝15日午前、川崎市㊦早紀江さんが好きだというめぐみさんの写真

1977年に新潟市立中1年の横田めぐみさん＝失踪当時⑬＝が北朝鮮に拉致されてから15日で40年となった。後半生を娘の救出活動に費やしてきた父滋さん⑧⑤と母早紀江さん⑧①が川崎市の自宅で記者会見し、早紀江さんは「すぐ近い国にいるのにどうして助けてあげられないのか」と苦しみを語った。拉致被害者曽我ひとみさん⑤⑧は新潟市内で「必ず帰る日が来る。諦めないで」と呼び掛けた。

⬇2面に関連記事

日本政府は拉致問題を最重要課題とするが、核・ミサイル開発を進める北朝鮮に日米が強硬姿勢を取る中、対話は進まない。早紀江さんは「署名活動や講演会など、ありとあらゆることをして訴えてきた」と強調した上で、進展しない事態に「政府は一生懸命やっていると思っていたが、本当に信じていてよかったのか」と打ち明けた。

めぐみさんはバドミントン部の練習を終えて下校中に消息を絶ち、今53歳になる。早紀江さんは「とにかく病気をしないでいてほしい」と話した。隣に座る滋さんを向き「助け合いながら支え合いながらやってきた」と思いやった。

滋さんは体が衰え、会見終了間際に訴えかけようとしたが、声が不明瞭で早紀江さんにもうまく聞き取れなかった。早紀江さんに体を支えられながら会見場を後にした。

新潟市で講演した曽我さんは、めぐみさん拉致の翌年に母ミヨシさん＝同㊻＝と一緒に拉致された。曽我さんは2002年に帰国を果たしたが、ミヨシさんの行方は分かっていない。

曽我さんは「めぐみさんには40年の、母には39年の家族との思い出がない。失った時間は戻らないが、これから先の時間を普通に過ごせるようにしてほしい」と訴えた。

1時間でも会いたい　早紀江さん一問一答

横田めぐみさんの母、早紀江さんの記者会見での一問一答は次の通り。

―40年たった思いを。

「すぐ近くの国に閉じ込められているのに、どうして助けてあげられないのか。国内の誘拐事件であれば警察も必死で助けようとする。それと同じなのに、なぜ放っておかれるのか。署名活動や講演会、ありとあらゆることをして訴えてきた」

―政府は本気で取り組んでいると思うか。

「一生懸命知恵を練ってやっていると思っていたが、結局40年たっても分からない状況に、本当に信じていてよかったのかという思いだ。私もそんなに長くない。本気度を持って救い出してほしい。向こうの国を壊してしまえ、などと思っているわけじゃない」

―夫滋さんへの思いは。

「性格や思いは違うが、早く助けたいとの根底は同じだ。支え合ってやってきた。私たちは普通のおじいさんとおばあさんでしかないが、政治や外交を見ながら暮らしてきた。めぐみちゃんだと確認できる間に、1時間でもいいから会いたい」

―めぐみさんにメッセージを。

「病気をしないで、元気でいて。お父さんお母さんは弱っても気持ちの上ではがんばるから、最後まで忘れないから」